



松坂屋 史料室 企画展 Vol.8

「松坂屋から巣立った芸術家たち」

平成23年12月1日(木)→平成24年2月26日(日)

明治後期、近代化を進めていた名古屋のいとう呉服店(松坂屋)は、江戸以来の座売りを陳列立売りに改めるとともに、ショーウィンドーを導入、さらにはPR誌を発刊するなど、情報発信のための機能を強化していった。そして、その過程で自ら流行を創り出すために新衣装のデザイン係ともいべき「意匠係」を設置したのである。その後、業務の拡大とともに営業店では宣伝部、京都仕入店では考案部と名をかえ、多くの人材を育てていった。修練のち松坂屋の枠に収まりきれず、外部に羽ばたいていった人も数知れない。こうした中から人間国宝が生まれ、画壇の大家が生まれた。また、松坂屋での経験を活かし、演劇部門の重鎮になった人もいる。

- | | |
|---|---|
| <small>くはたきんせん
みやながたけひこ
まつおかげんぞう</small> <input type="checkbox"/> 久保田金懲(1875–1954) 日本画家・舞台装置家 | <small>いながきとじろう
おおえりょうたろう</small> <input type="checkbox"/> 稻垣稔次郎(1902–1963) 染色家 |
| <input type="checkbox"/> 宮永岳彦(1919–1987) 洋画家 | <input type="checkbox"/> 大江良太郎(1901–1974) 演出家、脚本家 |
| <input type="checkbox"/> 松岡謙造(1925–) 図案家 | |

稻垣稔次郎(1902–1963)



雅と風趣の染色家と謳われ、昭和37(1962)年に染織の「型絵染」で人間国宝に認定された。松坂屋へは大正11(1922)年の入店。京都仕入店での担当は型友禅の図案の作成であった。昭和6(1931)年、染色工芸の研究に専念するため松坂屋を退社。その後、作家として発表した作品が、文展(日展)で3回特選に輝くなど、第一人者としての名声を不動のものとした。昭和33(1958)年に京都市立美術大学(現芸術大学)の教授に就任。以後、同大学の染織科は全盛期を迎える。

【略歴】

大正5(1916)年	京都市立美術工芸学校入学
大正11(1922)年	松坂屋京都店図案部へ勤務
昭和6(1931)年	松坂屋を退社、染色に専念
昭和33(1958)年	日本工芸会理事に就任
昭和37(1962)年	重要無形文化財保持者(型絵染)に認定



衣裳図案「四季の薫」(戦前)

掛け軸に仕立てられた稻垣稔次郎の振袖の図案。「黒地に群青の流水。光琳派の四季の草花を巧みに配置して上品なる落書きを見せて居ります」の評がついている。



標準図案「城」(昭和4(1929)年)

松坂屋では、大正14(1925)年から毎年、各店の意匠委員会で構成する流行研究会を京都仕入店で開催し、その年の流行色、模様を決定していた。そして、それを提案、発信する場が「流行会」であった。『昭和4年秋冬の流行』では、稻垣作の「松島」「城」「コマ」の3点が標準図案として採用された。

大江良太郎(1901–1974)



慶應大学で、演劇の父と謳われた小山内薫に師事。「三田文学」では小説家、劇作家・久保田万太郎の門下生として名を馳せた。松坂屋へは大正15(1926)年の入社。主に宣伝畑を歩み、広告の制作や催事の企画を担当した。昭和10(1935)年創刊のPR誌『新装』の編集にも携わった。勤めのかたわら劇団「新東京」「築地座」「新劇座」「新生新派」などに所属し、脚本や演出を手がけた。昭和16(1941)年に松坂屋を退社後は演劇に専念。多くの芝居やテレビドラマを世に送り出した。

【略歴】

大正11(1922)年	慶應大学高等部に入学
大正15(1926)年	松坂屋銀座店に入社
昭和14(1939)年	「新生新派」に加入
昭和16(1941)年	松坂屋を退社
昭和47(1972)年	藍綬褒章受章



「明治一代女」パンフレット(大江良太郎演出)

「明治一代女」は、第1回直木賞を受賞した川口松太郎の原作。映画や舞台でしばしば上映、上演されたこの名作を、昭和46(1971)年に大江良太郎が演出したときのもの。主役は、かつて大谷友右衛門の芸名で映画で活躍(代表作:佐々木小次郎)、のちに歌舞伎に戻った中村雀右衛門。共演が市村竹之丞(のちの中村富十郎)という豪華メンバーであった。



『新装』(昭和10(1935)年創刊)

『新装』は、昭和10(1935)年に会社創立25年を記念して企画したもので、編集を担ったのが銀座店広告係長・大江良太郎であった。グラビアを多用した流行商品の紹介、各月の催事案内、文芸読み物(隨筆・俳句・童話)などを掲載し、わが国を代表するPR誌とみなされた。





みやながたけひこ

宮永岳彦(1919-1987)



「光と影の華麗なる芸術」と謳われ、油絵、ポスター、童画、表紙画、挿絵、水墨画などの分野で多彩な作品を残した。名古屋市立工芸学校を卒業した昭和11(1936)年、松坂屋名古屋店に入社。宣伝部に配属となる。昭和17(1942)年、二科展に創業家別荘・揚輝荘の慰問風景を描いた「慰問」が初入選。戦後、銀座店に異動となり、勤務のかたわら創作活動を続けた。昭和22(1947)年、「二紀会創立展」に出品、褒賞を受け同人に推挙され、同61(1986)年に二紀会理事長に就任した。

【略歴】

昭和7(1932)年	名古屋市立工芸学校入学
昭和11(1936)年	松坂屋名古屋店に入社
昭和21(1946)年	軍隊から復員。銀座店に配属
昭和33(1958)年	銀座店宣伝部の嘱託となる
昭和61(1986)年	紹綬褒章受章



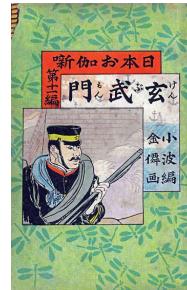
「歳暮大売出し」ポスター(昭和33(1958)年)

松坂屋宣伝部にあって多種多様なポスターを制作した技量は、またたく間に宮永を商業美術界のスターに押し上げた。全日空、小田急電鉄など多くの観光ポスターを精力的にこなし、その活躍は戦後日本の商業デザイン界の発展と軌を一にするといわれた。デザイナーとしての仕事は、小田急ロマンスカーの内装、外装をはじめ各種シンボルマークや包装紙まで多岐にわたる



『若くて悪くて凄いこいつら』装丁・挿絵
(柴田錬三郎作、宮永岳彦挿絵・装丁／昭和47(1972)年)

宮永の装丁は、初期はデザイン感覚を前面に打ち出したものが多かったが、徐々にその筆力を生かしたものに移行していった。代表作に、『夢でありたい』(舟橋聖一、新潮社、昭和46年)、『陽のある坂道』(石坂洋次郎、新潮文庫、昭和47年)など。『若くて悪くて凄いこいつら』は、『週刊明星』連載時から挿絵も担当した。



『日本お伽噺 玄武門』

(巖谷小波(さざなみ)編、久保田金僕挿絵／大正6(1917)年)

名古屋店は、明治44(1911)年から毎年、春の一大イベントとして、お伽噺の口演、少年音楽隊の演奏、活動写真(映画)の上映などを盛り込んだ「コドモ博覧会」を開催してきた。なかでもお伽噺は、児童文学学者として名高い小波(さざなみ)が出演するとあって人気を呼んだ。

小波は明治29(1896)年から32(1899)年にかけて『日本お伽噺』叢書全24巻を刊行したが、その第11編の挿絵を担当したのが金僕(きんせん)であった。



『もみぢ』(明治44(1913)年刊)

紅葉の図案集ともいべき『もみぢ』は、いとう呉服店が刊行した最初の書物で、名古屋店意匠係の久保田金僕が編集を担った。出版社は木版多色刷で名高い芸州(うんそう)堂で、以後いとう呉服店は、同社から『深潭』『新生』『新サラセン式』『新珠』などを出版した。



出征記念署名日の丸(松岡謙造所蔵、昭和19(1944)年)

昭和19(1944)年、東京美術学校(東京藝大)の学生だった松岡が、出征前に教官たちに署名してもらったもの。小林古径、安田駿彦、梅原龍三郎、奥村土牛らが名を連ねている。画壇の最高実力者・横山大観の署名も上段に見える。



福袋

初売りの縁起物として多くの人が購入する百貨店の福袋は、明治44(1911)年にいとう呉服店(松坂屋)が行った「多可良函」が最初といわれる。松岡は、全国各地の干支の民芸品を題材にして、お正月にふさわしい名前を数多く残した。

くぼたきんせん

久保田金僕(1875-1954)



日本画家久保田米僕の次男。画を父に学び、さらに京都府画学校で学んだ。文展(現在の日展)、院展をはじめ多くの入賞歴を誇る。明治27(1894)年、国民新聞の従軍記者となり、日清戦争、日露戦争を取材した。明治39(1906)年に名古屋の「いとう呉服店」に入店。呉服のデザインを行なうかたわら、PR誌『衣道樂』の編集を行った。その後、東京に転勤となり、宣伝部長として活躍、昭和5(1930)年に退職した。日本画家のみならず、舞台装置家としても有名。

著書に『日本のおどり』『もみぢ』、編著に『下谷上野』がある。

【略歴】

明治39(1906)年	いとう呉服店(松坂屋)入社
明治41(1908)年	絵画研究のため渡米
明治43(1910)年	名古屋店に意匠係長で再入社
大正4(1915)年	文展(現日展)に初入選
昭和5(1930)年	宣伝部長で上野店を定年退職

まつおかんぞう

松岡謙造(1925-)



昭和23(1948)年9月に東京美術学校(現東京藝術大学)工芸科图案部を卒業。翌年3月に松坂屋へ入社した。名古屋店宣伝課では、長きにわたって福袋や手拭い兼用ふきんの图案を手がけ、また松坂屋名古屋駅店の開店記念メダルのデザイン制作も担当など、エースとして活躍した。対外的には、伊勢総合会館やトヨタ自動車工業総合体育馆の縫帳(どんちょう)のデザインなども行った。また愛知県立新設高校の校章を数多くデザインしたことでも知られる。昭和43(1968)年から日本デザイナー学院の非常勤講師、同53(1978)年からは名古屋芸術大学美術学部の非常勤講師を務め、後進の指導にも尽力した。

【略歴】

昭和18(1943)年	東京美術学校(東京藝大)入学
昭和24(1949)年	松坂屋名古屋店入社
昭和26(1951)年	日本宣伝美術会会員
昭和43(1968)年	日本デザイナー学院非常勤講師
昭和61(1986)年	松坂屋を定年退職



Matsuzakaya

松坂屋・名古屋

〒460-8430 名古屋市中区栄3-16-1
TEL:052-251-1111
www.matsuzakaya.co.jp/nagoya/